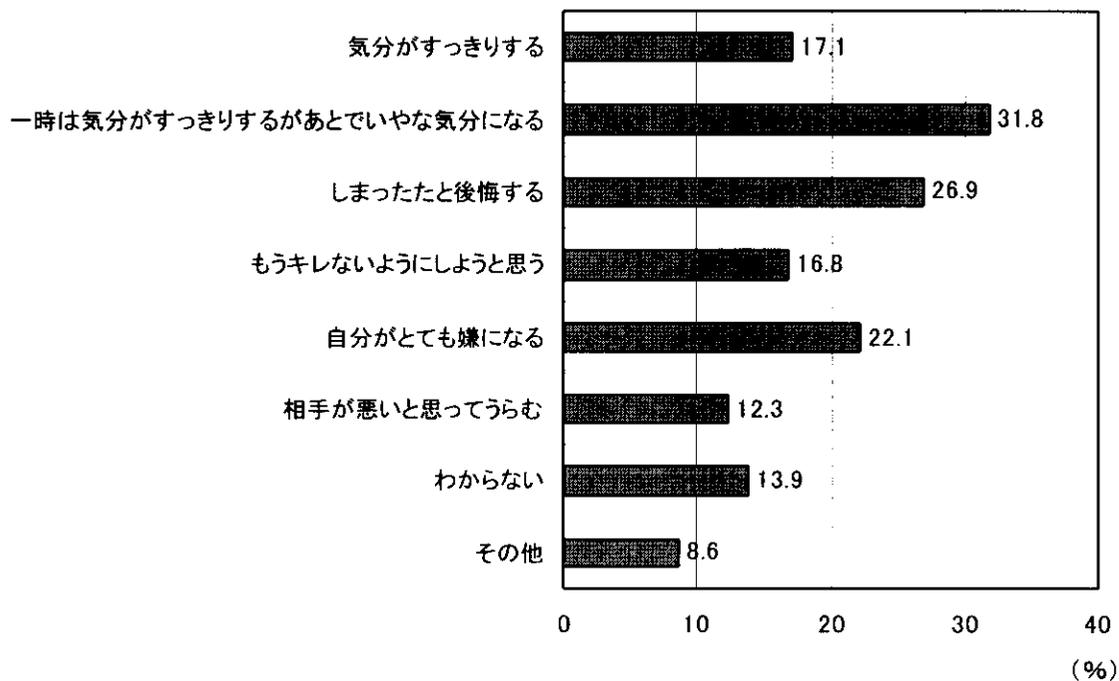


A-3. 「キレた」ことについて、後でどのような気持ちになった？（複数回答可）

キレた後どうなったか尋ねたところ、「キレて気分がすっきりした」という子どもは17.1%に止まっており、「後で嫌な気分になる」「後悔する」「もうキレないようにしようと思う」「自分がとても嫌になる」など、反省・後悔を選択した子どもが多かった。

キレたあと、しばらくしての気分

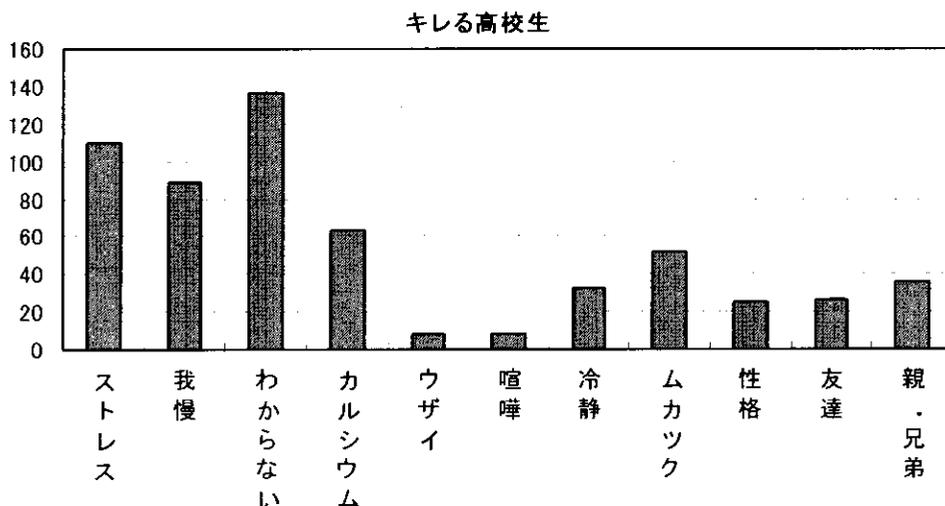
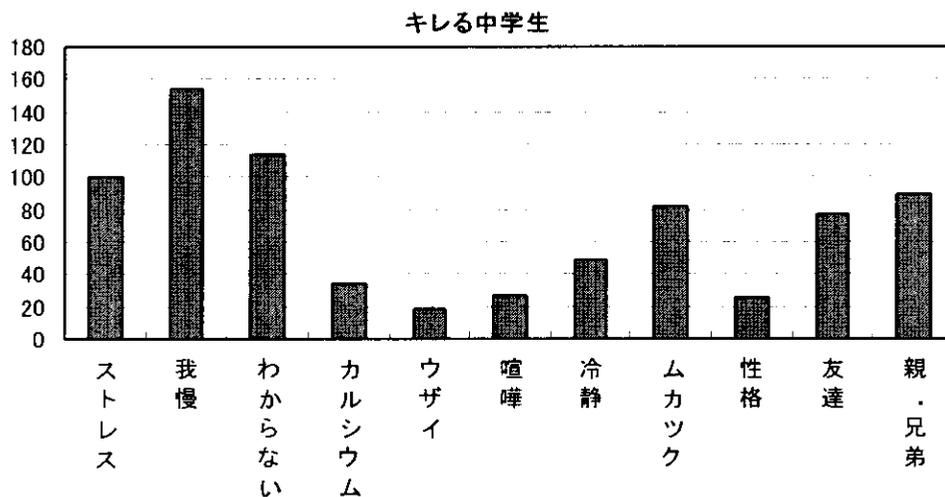


A-4. あなたがキレル原因はなんだと思いますか。また、今後キレないためにはどうすればよいと思いますか。自由に記述してください。

・回答中のキーワードを拾い上げ、各言葉の絶対数を以下に図示した。(個別回答別記)

中学生の自由回答の中で最も多く使われた言葉は「我慢」であった。内容は「我慢が出来ない」「我慢しなければならない」などであった。高校生では「わからない」というキーワードが最も使用された。

中学生・高校生共通して、使われたキーワードで多かったものは「ストレス」「我慢」「わからない」の3つであった。

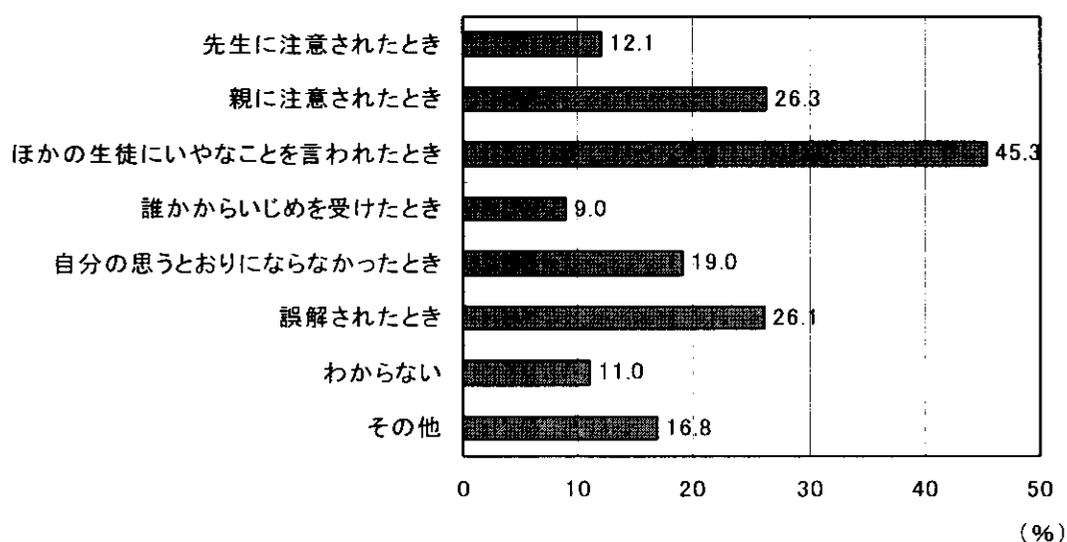


質問B：キレそうになったが、がまんしたグループの回答

B-1. どのようなときにキレそうになったか？（複数回答可）

キレそうになったが我慢したと答えた子どもたちに、どのような時にキレそうになったか尋ねたところ、「他の生徒に嫌なことをいわれたとき」45.3%、「親に注意されたとき」26.3%、「誤解されたとき」26.1%となり、Aグループのキレたことがあると答えた子どもたちと順位的に違いはなかった。

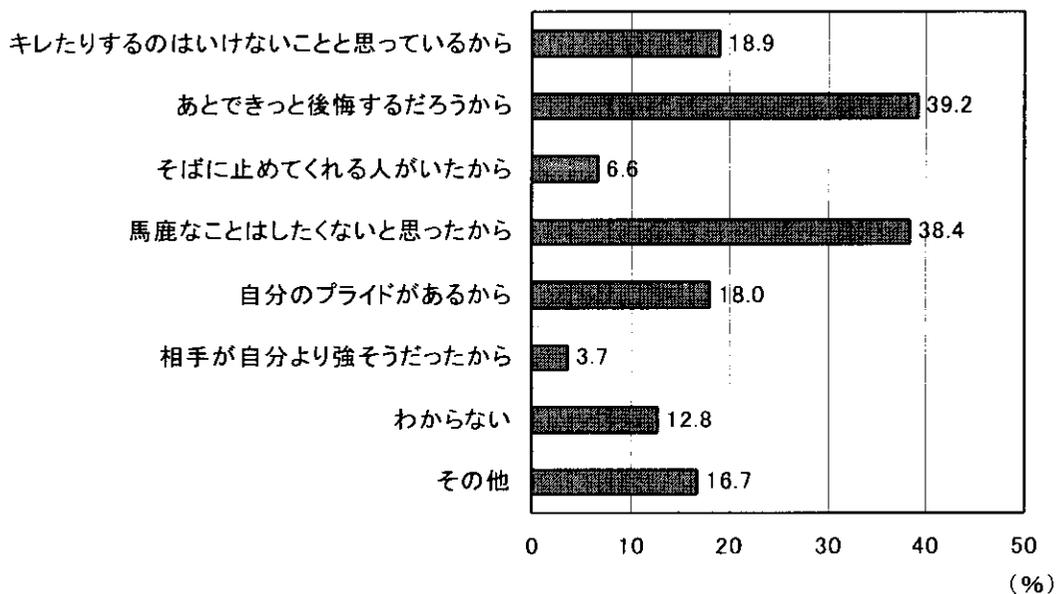
どのようなときにキレそうになったか



B-2. キレるのを抑えることができたのはなぜ？（複数回答可）

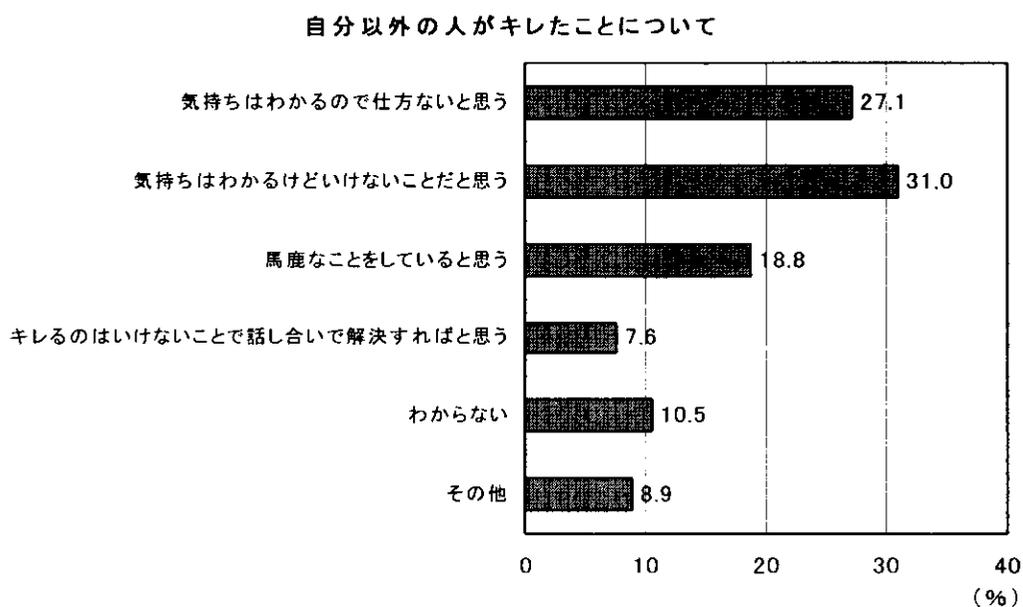
キレるのを抑えた理由として、「後できっと後悔するだろうから」が 39.2%、「馬鹿なことはしたくないと思ったから」が 38.4%であり、この二つが突出していた。

なぜキレずに我慢できたか



B-3. 自分以外の人がキレることについて（1つだけ選択）

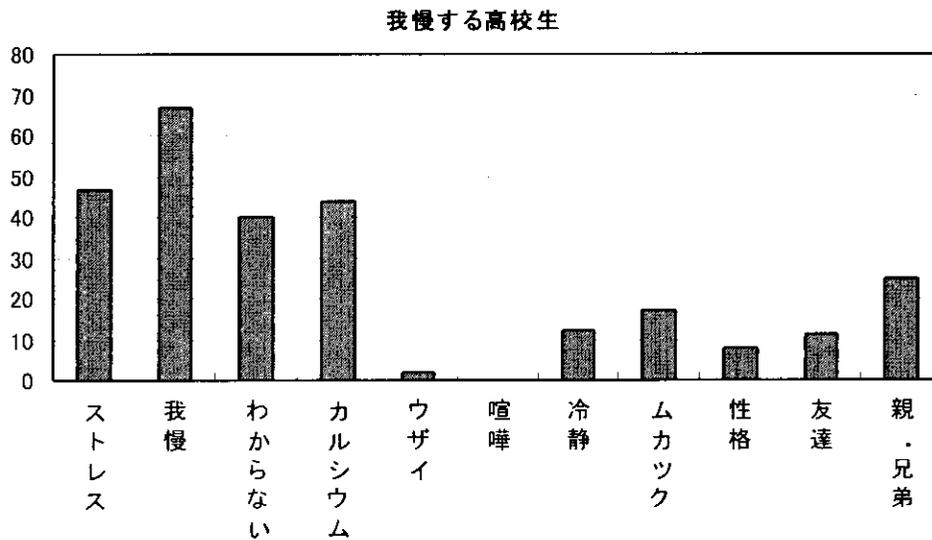
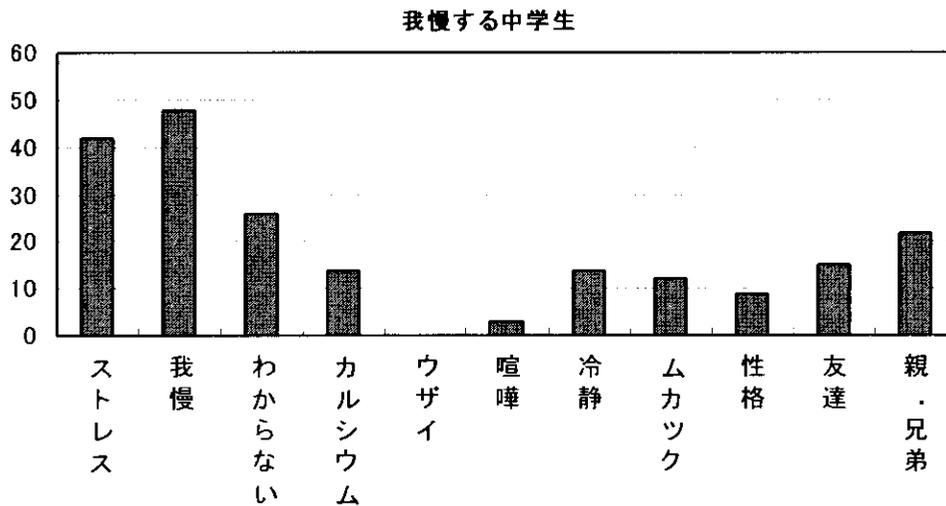
他人がキレていることについて、「気持ちはわかるけどいけないことだ」が最も多く 31%、次いで「気持ちはわかるので仕方ない」が 27.1%、「馬鹿なことをしている」18.8%、「わからない」10.5%、「キレるのはいけないことで話し合いで解決すれば」7.6%となっている。「気持ちはわかる」という答えは 6 割近くみられたが、気持ちはわかるけどいけないこと、とする考え方と、気持ちはわかるので仕方ない、とする考え方は全く異なり、思考の分かれ目として注目される。



B-4. あなたは、他の人がキレる原因はなんだと思いますか。また、キレないためにはどうすればよいと思いますか。自由に記述してください。

・回答中のキーワードを拾い上げ、各言葉の絶対数を以下に図示した。(個別回答別記)

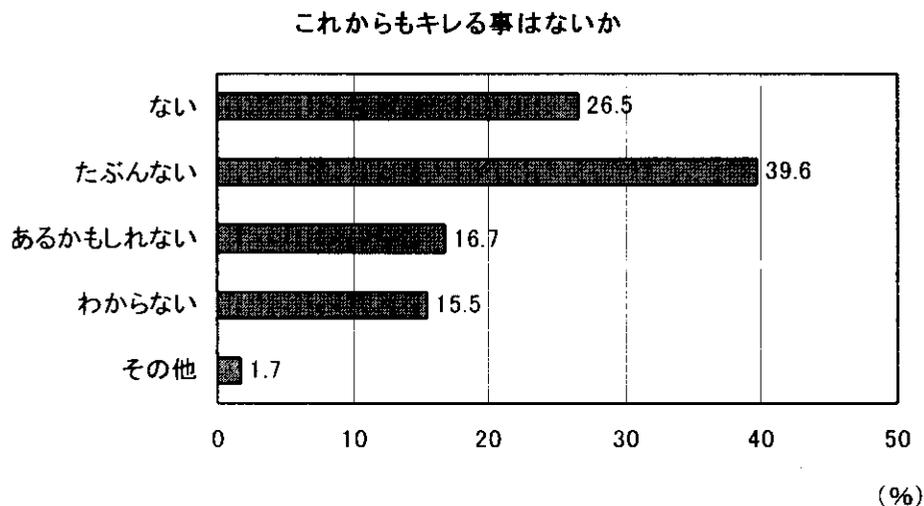
我慢する子どもたちの自由回答の中では、中学生ではキレる子どもたちと同様、「ストレス」「我慢」「わからない」が上位を占めたが、高校生では「カルシウム」というキーワードが多く使用されており、からだに取り入れる薬品や栄養的なものに関心のあることが窺える。



質問C：キレそうになったことはないし、キレた経験もないグループの回答

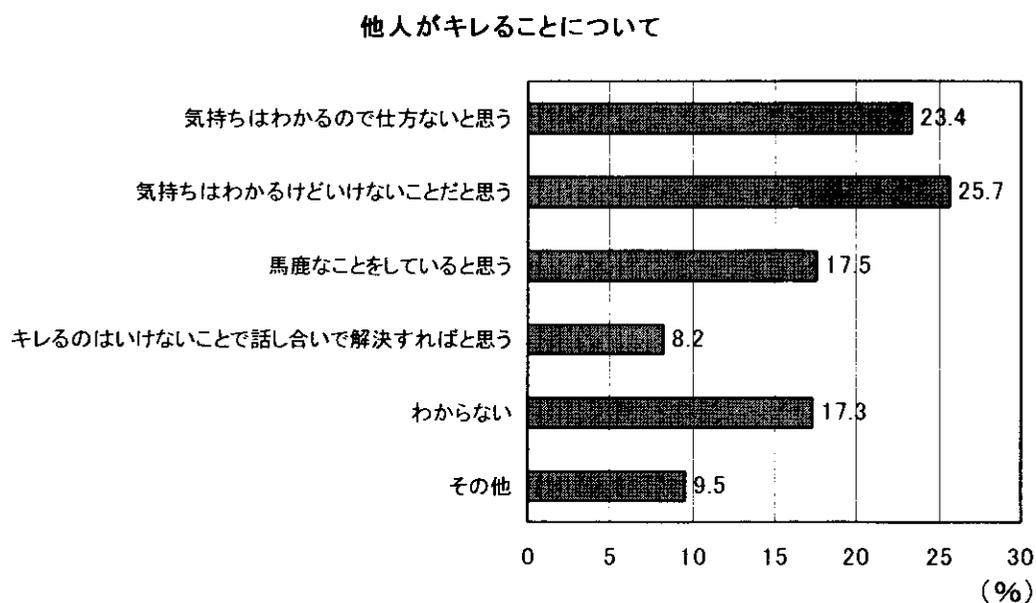
C-1. これらもキレることはないと思うか？

キレた経験のない子どもたちに、今後キレることがあると思うか聞いたところ、「ない」「たぶんない」を合わせて65%が自分はおそらくキレることはないとしている。



C-2. 自分以外の人キレることについて、どう思うか？（1つだけ選択）

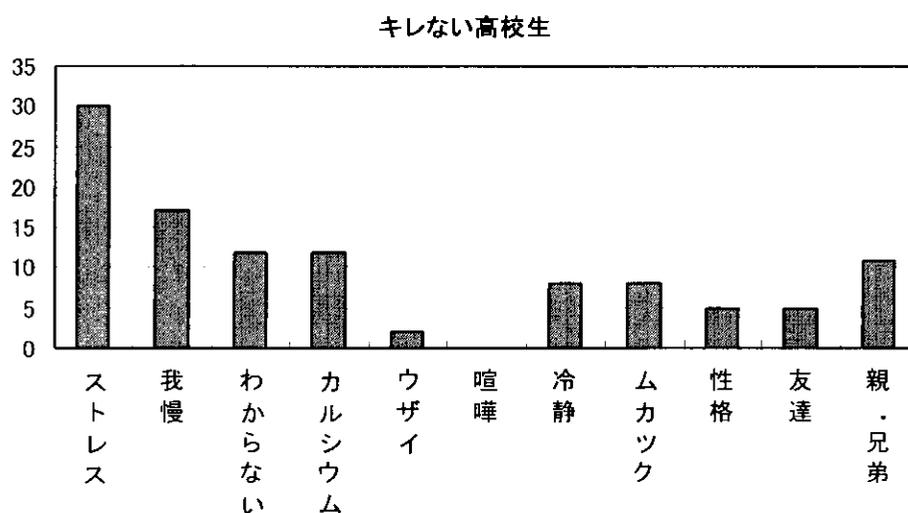
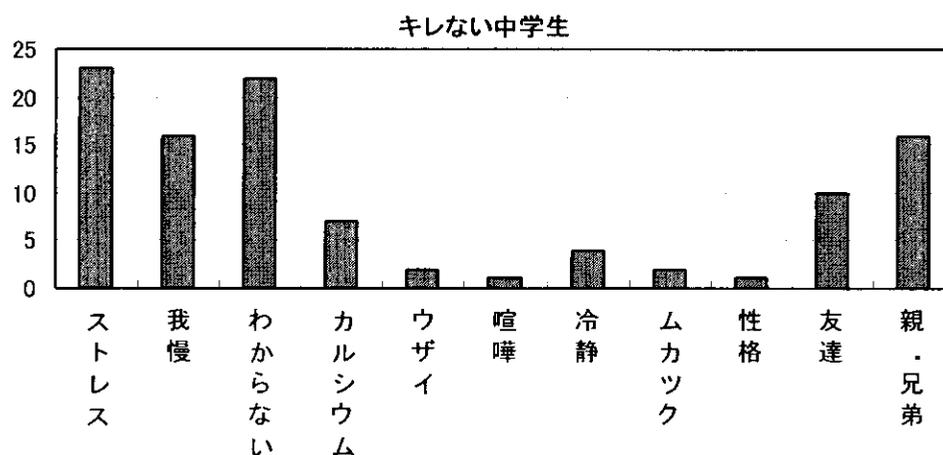
Bの我慢した子どもたちと同様、「気持ちはわかるけどいけないことだ」が最も多く25.7%、次いで「気持ちはわかるので仕方ない」が23.4%だった。これはB群に比べてどちらもやや低い比率である。合計で「気持ちはわかる」という答えは50%近くに達したが、これは我慢した子どもたちに比べて10%程度減少しており、「わからない」とする回答が増えている。



C-3. あなたは、他の人がキレる原因はなんだと思いますか。また、キレないためにはどうすればよいと思いますか。自由に記述してください。

・回答中のキーワードを拾い上げ、各言葉の絶対数を以下に図示した。(個別回答別記)

キレない中学生で使用されたキーワードでは「キレる子ども」「我慢する子ども」と同様、「ストレス」「我慢」「わからない」が多かった。しかし高校生では「ストレス」が突出しており、「我慢」「わからない」は他の子供達ほど使用されていない。



さらに、「キレル子ども」「我慢する子ども」「キレない子ども」を中高生に分け、使われたキーワードの順位を比較した。以下に示すように「ストレス」「我慢」「わからない」の3種類がどの項目でも上位を占めているが、中学生は「親・兄弟」、高校生は「カルシウム」をキーワードとして多く使用している。

	1位	2位	3位	4位	5位
キレル中学生	我慢	わからない	ストレス	親・兄弟	ムカツク
キレル高校生	わからない	ストレス	我慢	カルシウム	ムカツク
我慢する中学生	我慢	ストレス	わからない	親・兄弟	友達
我慢する高校生	我慢	ストレス	カルシウム	わからない	親・兄弟
キレない中学生	ストレス	わからない	我慢	親・兄弟	友達
キレない高校生	ストレス	我慢	わからない	カルシウム	親・兄弟

D. 考察

アンケートに対して質問表II-4「あなたはキレたことがありますか」という質問を基本として、各設問に対しクロス集計を行った。

なお大局的に傾向を把握するために「あなたはキレたことがありますか」に対する回答 8 種類を以下のように 4 区分した。

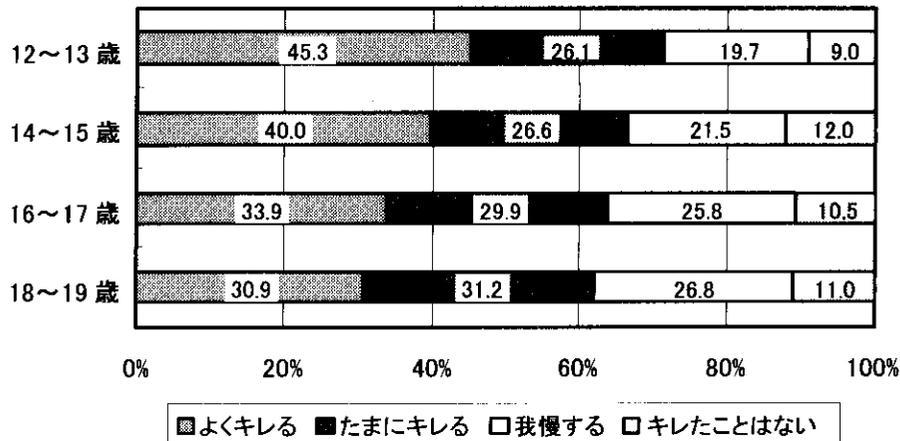
区分	質問表での項目
よくキレル	①しょっちゅうある
	②1日1回くらいはある
	③1週間に何回かはある
	④時々キレル
たまにキレル	⑤数回キレたことがある
	⑥1,2回キレたことがある
我慢する	⑦キレそうになったが、我慢した
キレたことはない	⑧キレそうになったことはないし、キレた経験もない

1. 年齢との関係

年齢との関係では、加齢と共に「よくキレル」「たまにキレル」割合が減少し、「我慢する」の割合が上昇していることが分かる。

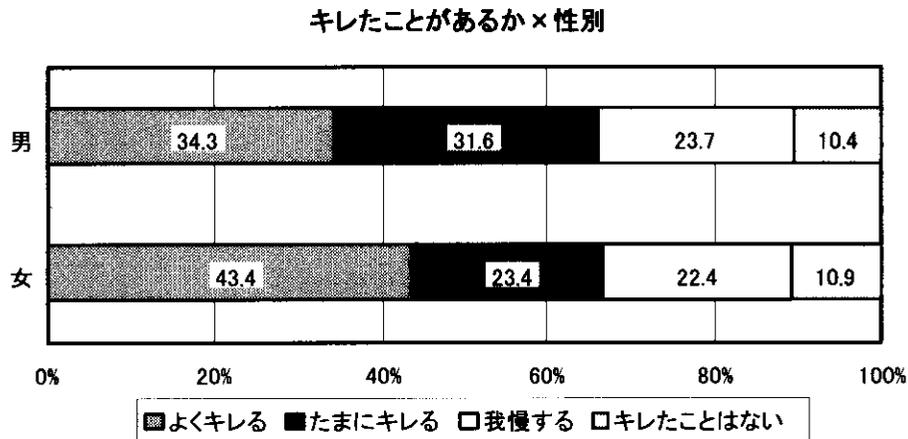
送付致します

キレたことがあるか×年齢

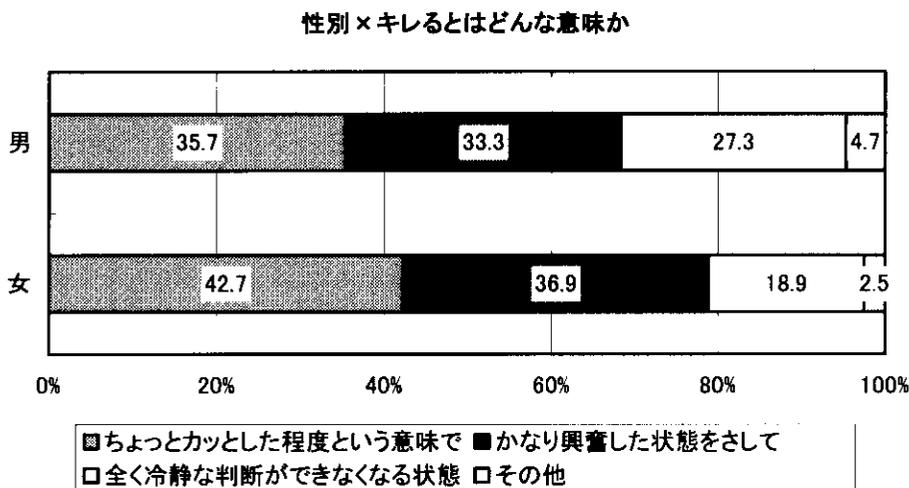


2. 性別との関係

性別による差は男女で明確に現れている。「よくキレル」「たまにキレル」を合計すると性別による差はほとんど見られないが、男子は「たまにキレル」比率が高く、女子は「よくキレル」比率が高い。女子は、自分はキレル頻度が多いと認識しているといえる。

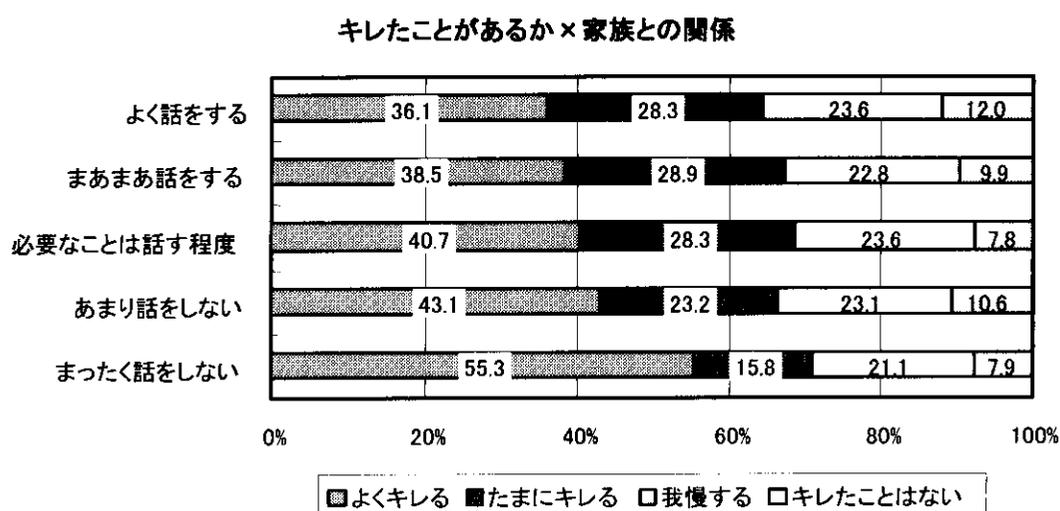


ここで、女子が「キレル」という言葉をどのように捉えているかをみると、「ちょっとカッとした程度」が多く、よくキレルと自己評価しているものの、男子よりもキレルという言葉を経い意味で捉えていることが分かる。



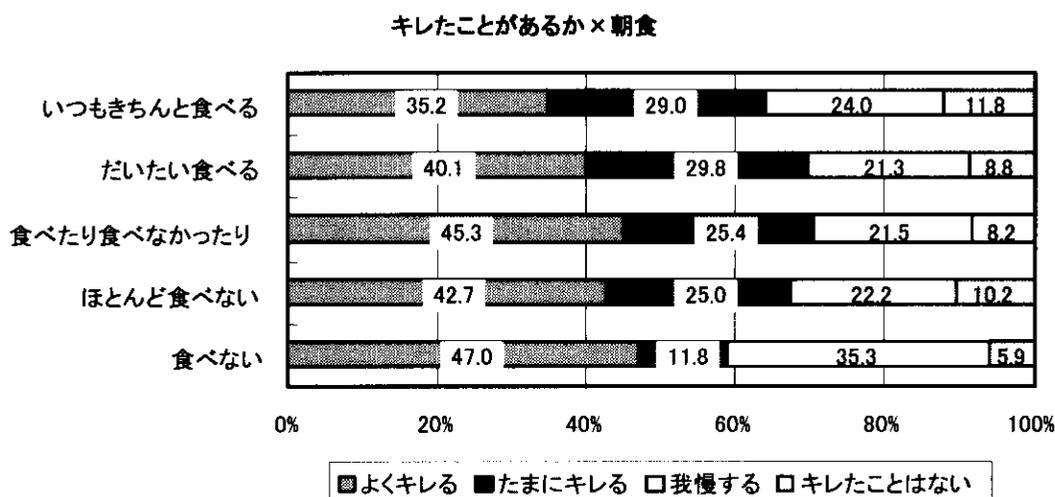
3. 家族との会話との関係

家族との会話の関係では、日常的な家族とのコミュニケーションによって、切れる割合が変化することが示された。「よくキレル」と「たまにキレル」を合計して見た場合は全区分あまり変わらないが、「よくキレル」だけを見ると、「家族とよく話をする」ほうがキレル割合が抑えられていることが分かる。「家族と全く話をしない」と答えた子どもは、過半数が「よくキレル」と自己認識しており、このことから、思春期の子どもたちに対して家族がコミュニケーションをうまく取ることがキレル頻度を抑える、ということが示唆されたといえる。

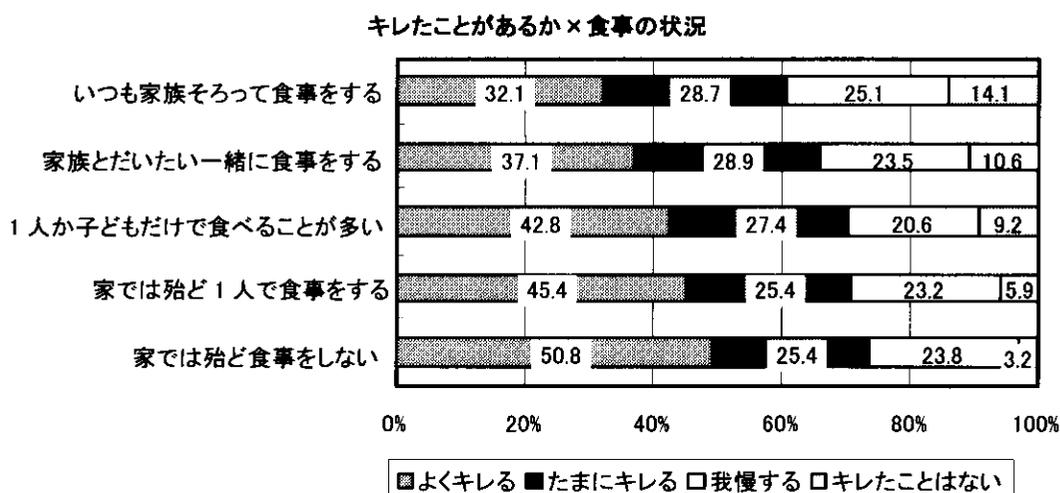


4. 食事との関係

食事との関係では、朝食を食べている頻度が高いほうが「よくキレル」割合の低いことが示された。また非常に特徴的な傾向として「朝食を食べない」と答えた子どものうち35%が「我慢する」と答えている。食事をしないということは、食事ができない環境にあるためと、できる環境にあるが食べない、という2通りの状況が考えられ、食事をできる環境にあるが食べないという場合は、何か強い理由や意志が存在することも推察できるため、こうした両極の回答が得られたのかもしれない。



また食事の状況については、家族揃ってと食事をするほうがキレル割合が少ないことが明確に示された。これは前問の「家族と話をするか」と同様にコミュニケーションの必要性を表しているといえる。また食事の状況における特徴的な傾向として、他の項目ではほとんど数値が左右されなかった「キれたことはない」が、家族とのコミュニケーションの不足の増加に従って、「食事の状況」では明確な減少傾向を示した。

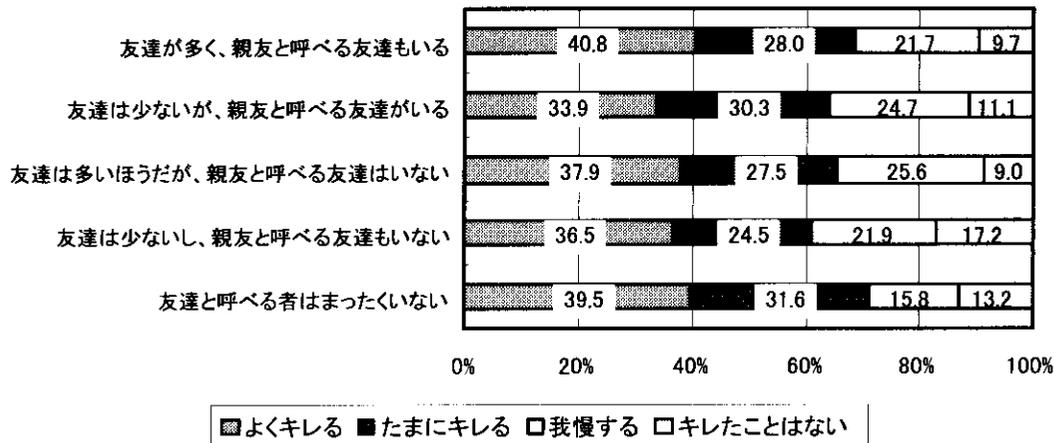


5. 友達との関係

友達との関係では、家族とのコミュニケーションほど明確な差が現れなかった。但し、「友達と呼べる者はまったくいない」はキレル割合が最も高いという特徴は把握された。しかし、「友達も多く、親友と呼べる友達もいる」と答えた子どもが「よくキレル」比率が高く、「友達は少ないし、親友と呼べる友達もいない」と答えた子どもがキレル割合が最も少ないということで、統一した傾向はみられない。

友達の多さや親友の存在とキレル頻度については、本調査からは関係が見いだせなかった。

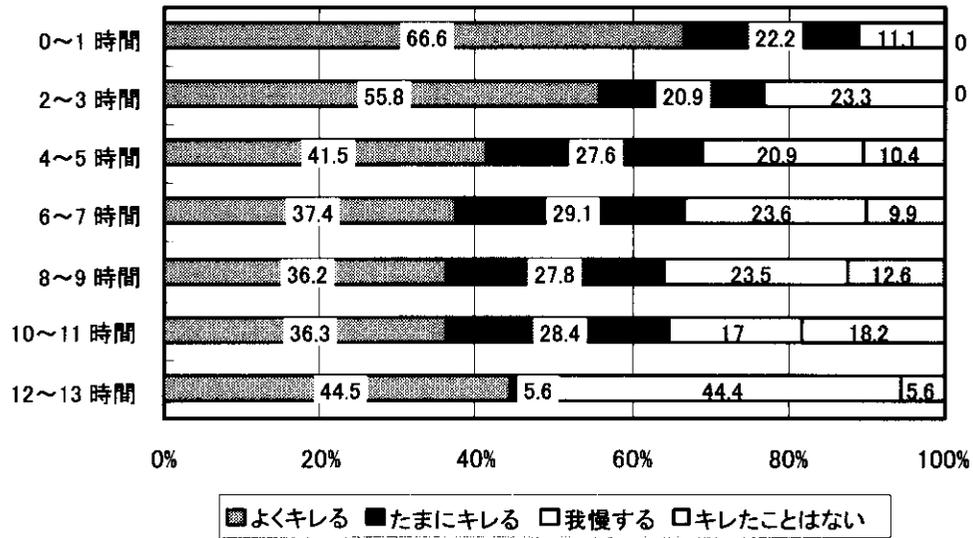
キレルことがあるか×友達との関係



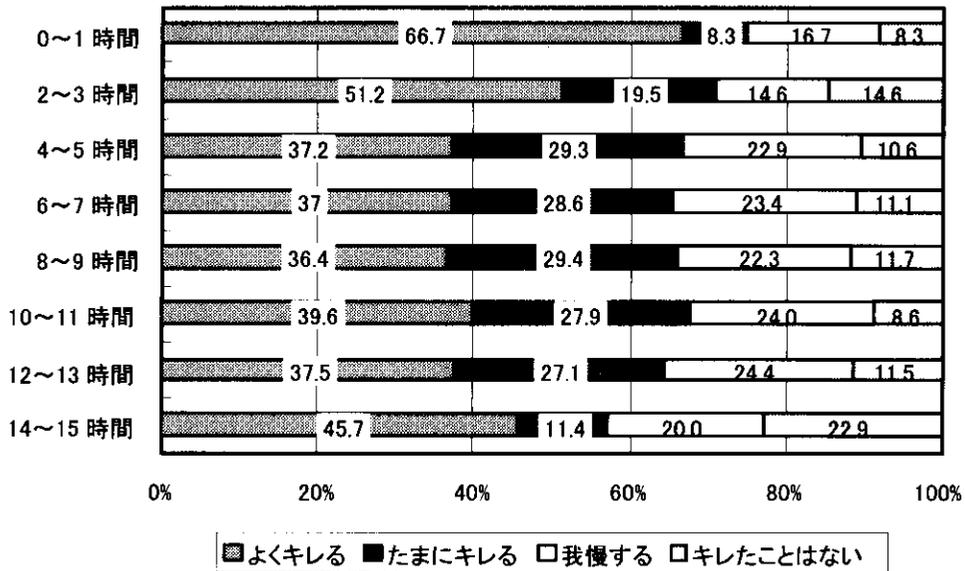
6. 睡眠との関係

キレルことと就寝・起床時間について、時間帯による大きな差異は認められなかった。しかし、睡眠時間とキレルについては関連性が示された。平日の睡眠時間が0～1時間と回答した子ども（現実には不可能と考えられるが）は、9割弱がキレルと回答しており、2～3時間で8割弱、以下睡眠時間が長くなるほどキレル割合が減少している。逆に休日の睡眠時間は平日ほどにはキレル割合に変化は見られなかった。

キレたことがあるか×平日睡眠時間



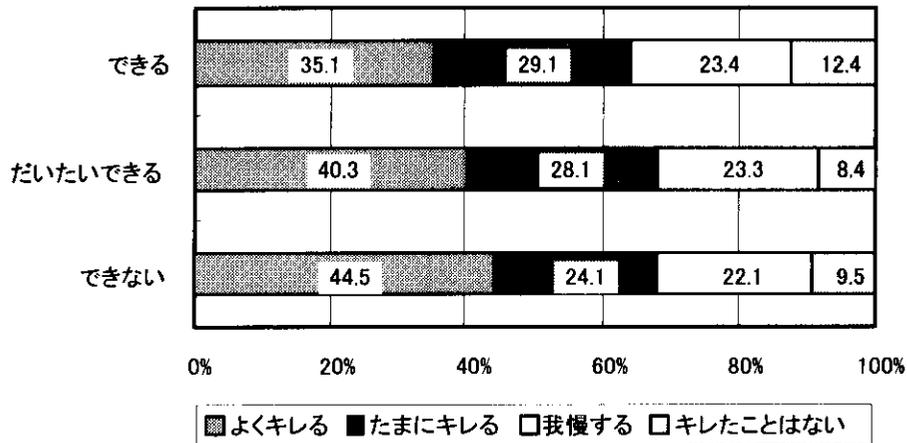
キレたことがあるか×休日睡眠時間



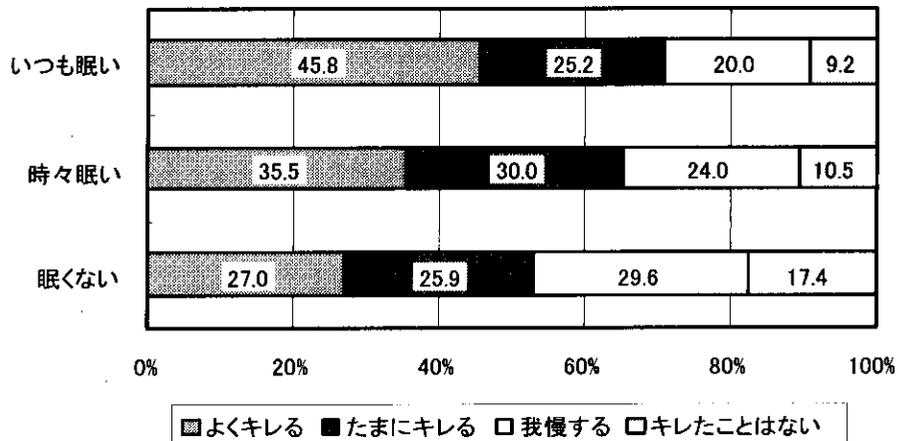
キレることと熟睡できるかについては「よくキレル」と「たまにキレル」を合計したキレル全体では明確な傾向がみられなかったが、「よくキレル」に関してはある程度の関連が見られ、熟睡できない場合はキレル頻度が高いことが示された。

一方、眠気についてはより密接な関連性が示された。「いつも眠い」と答えた子どもはキレル割合が7割に達し、「眠くない」と答えた子どもではその割合が5割強に抑えられていることが示された。

キレたことがあるか×熟睡

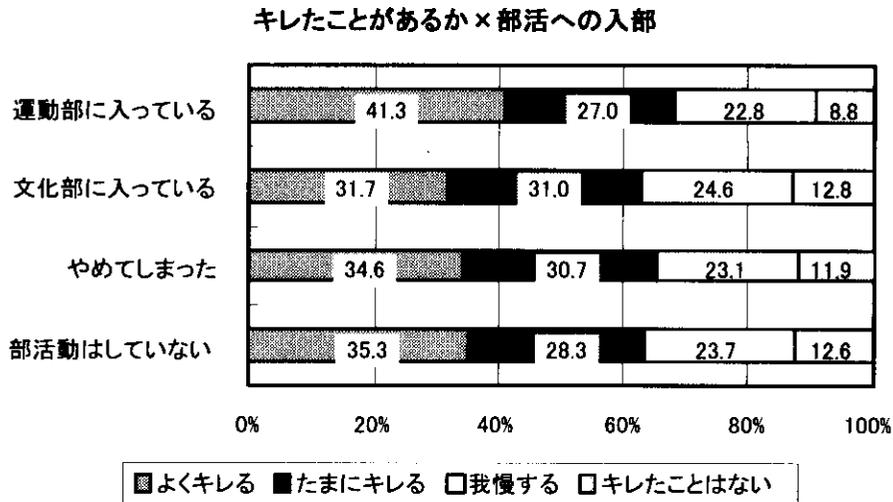


キレたことがあるか×眠気

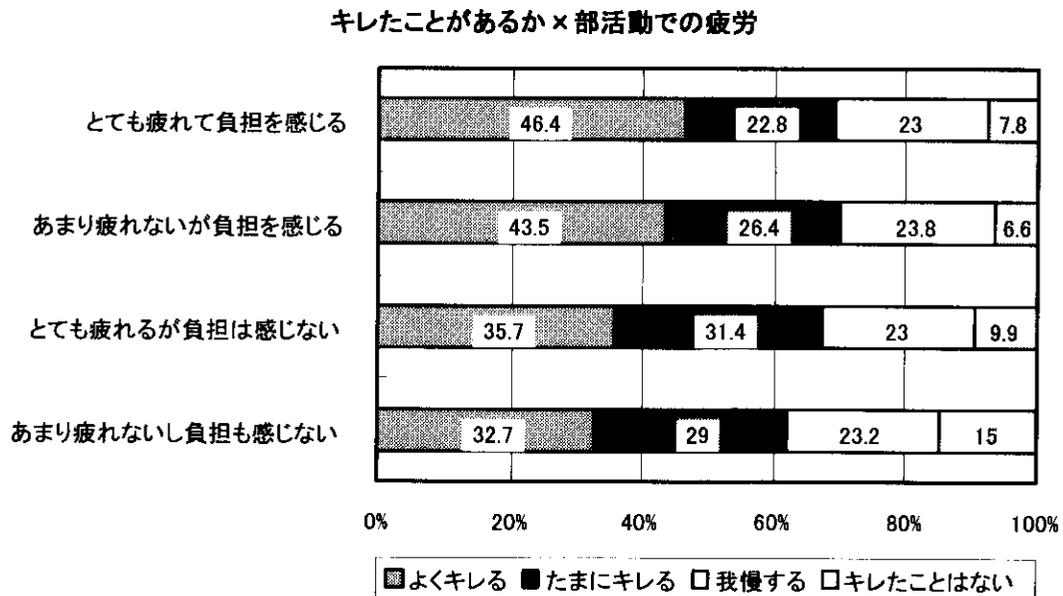


7. 部活動との関係

部活をやっていることとキレることについては、運動部に入部している子どもが若干「よくキレる」傾向が強いものの、「よくキレる」と「たまにキレる」を合わせると、どの区分にも大差は無く、部活動の所属の有無はキレることに大きな関連のないことが示された。

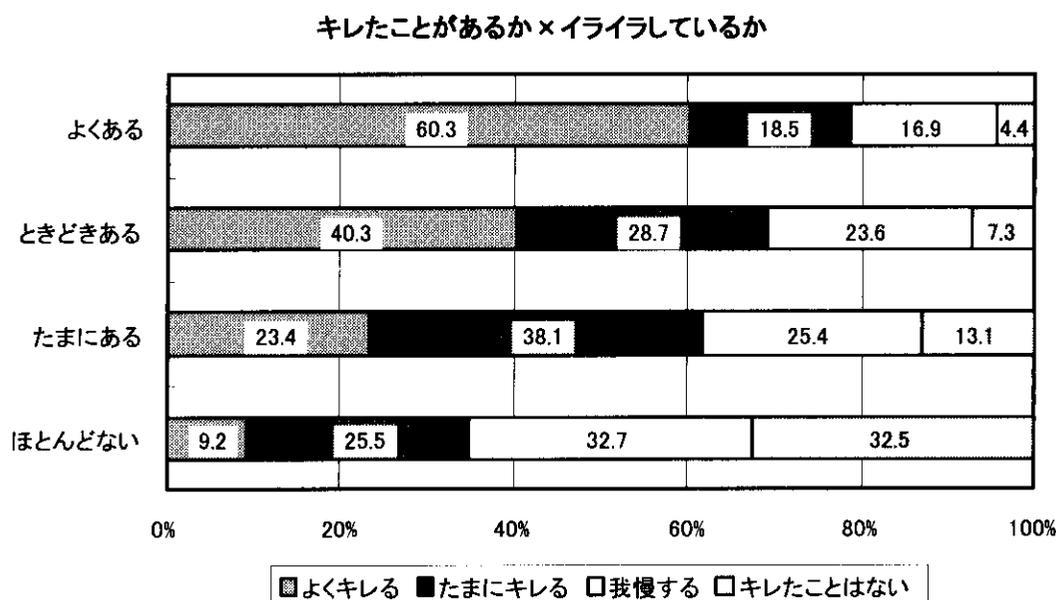


しかし、部活での疲労と負担感は、よくキレる傾向を増長しており、「とても疲れるが負担は感じない」「あまり疲れないし負担も感じない」は「とても疲れて負担を感じる」「あまり疲れないが負担を感じる」と比べて「キレることはない」割合が多く、《キレる》に関しては、「疲労」よりも「負担」の方が直接的な原因となるものと考えられる。

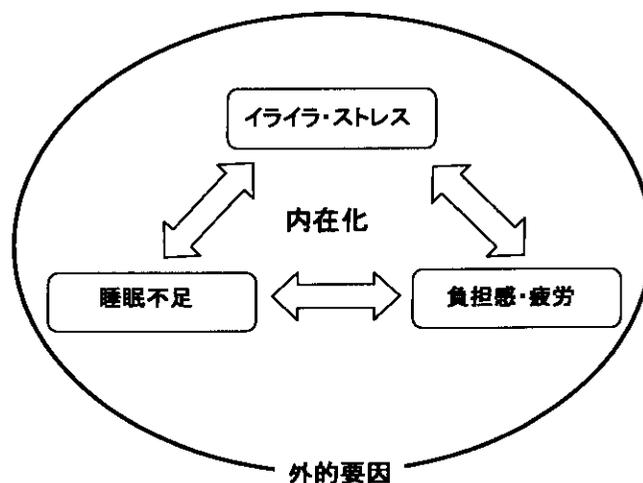


8. イライラしていることとの関係

イライラしていることは《キレル》と密接に関係しており、イライラしていることが「よくある」と答えた子どもは6割が「よくキレル」、2割弱が「たまにキレル」で、合計約8割がキレルとしており、イライラしていることがなくなるほどキレル割合が減少していることがわかる。特にイライラしていることが「ほとんどない」とした子どもたちは、「我慢する」32.7%、「キレたことはない」32.5%で、合わせて65%が「キレない」としており、キレないためにはイライラしないことが重要であるといえる。イライラしないためにはどうするか、複雑な要素が絡み合うことは必至であるが、今後の検討課題としたい。

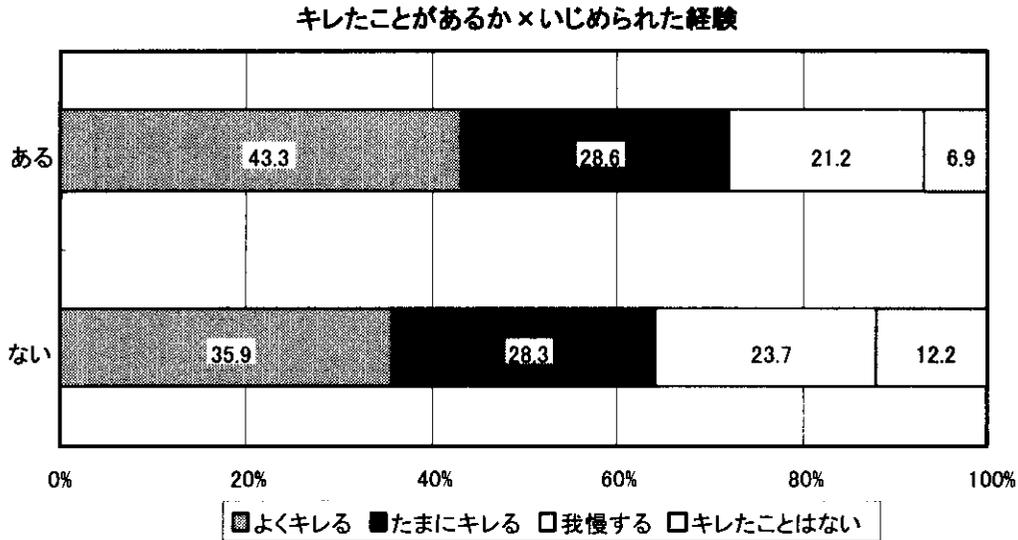


「睡眠時間」「負担感・疲労」「ストレス・イライラ」は上記のように明確な傾向が現れており、この3つが相まってキレル要素が内在化していると考えられる。今後どこかでこの連鎖を断ち切ることで、キレル傾向に一定の歯止めが利くのではないかとと思われる。

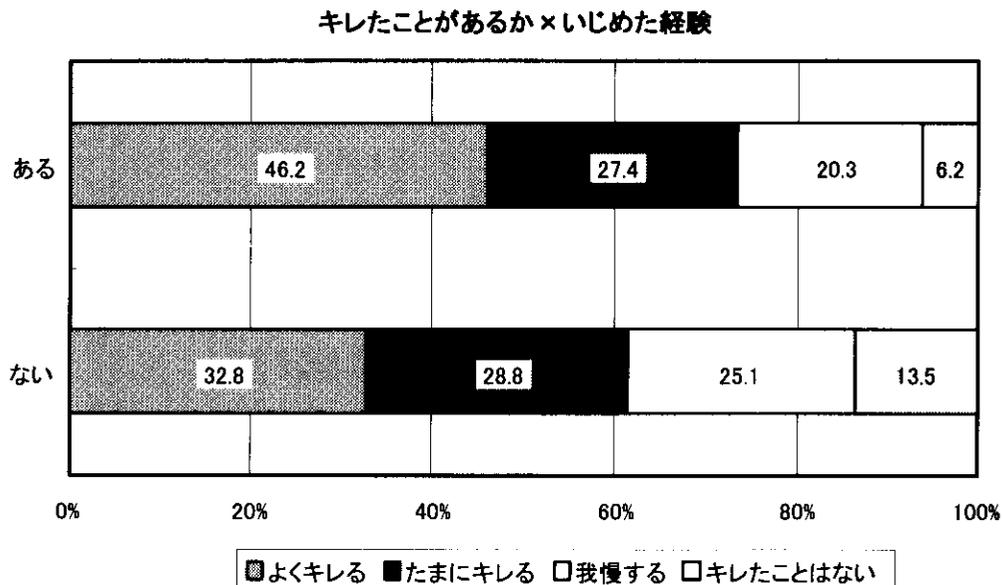


9. いじめとの関係

キレることといじめられた（被害者）経験の関係は、いじめられたことがあるとした子どもの方がよりキレやすい傾向であることが示された。



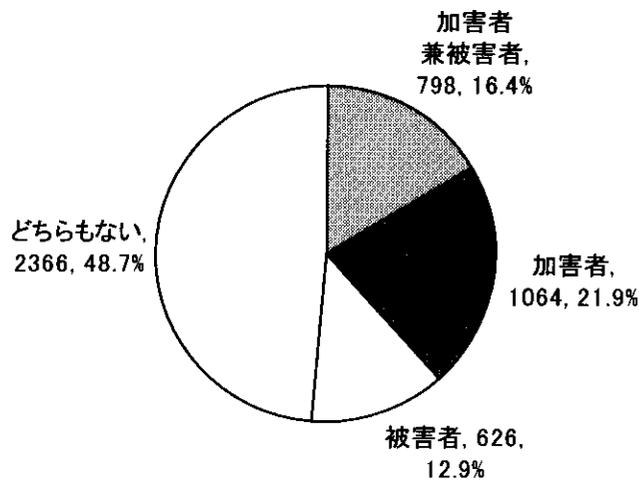
逆にいじめた（加害者）経験においても、いじめた経験のある方がないほうよりもキレやすい傾向にあることが示された。



結局、いじめられた側(被害者)も、いじめた側(加害者)もキレやすい、という結果が得られたことから、いじめとキレるとの関係性をさらに検討した。

いじめには被害者、加害者が存在するが、加害者兼被害者という場合もあり得る。そこで、本調査のいじめに関する回答を「加害者兼被害者」「加害者」「被害者」「どちらでもない」の4グループに分類すると、以下の円グラフに示すように、「加害者兼被害者」16.4%、「加害者」21.9%、「被害者」12.9%、「どちらでもない」48.7%となった。これらを「キレたことがあるか」とクロスすると、加害者側の方が被害者側よりもキレる傾向が強く、しかも、一方的な加害者よりも加害者兼被害者グループの方がキレやすいという結果が得られた。これは、いじめにあった者が再びいじめられないためにいじめる側になり、「キレる」という行動をとるなどして自己防衛を図っているのではないかと推察される。また、被害者は「我慢する」「キレた経験なし」が高い割合となっていた。いじめの被害に遭った子どもが、日頃ずっと我慢をしていて突然キレるようなことが起こった場合、大きな事件に繋がることも考えられる。いじめに関してはさらなる調査研究が必要であるが、いじめを防ぐことの重要性が強調される。

いじめ 加害者と被害者



キレることがあるか×いじめとの関係

